

西原の音楽家

新川嘉徳

♪春や花盛り

野ん山ん咲ちゆい

種々ぬ花ぬ

咲ちよる美らさ♪

（春は野にも山にもたくさんの花が咲きほころぶ。その花々の美しいことよ）

おなじみ、琉球民謡「梅の香り」の歌詞の一節です。心浮き立つような春にふさわしい内容のこの曲、西原出身の音楽家の作品であることをご存知でしたか？

一九三九（昭和十五）年、大阪のマルフレコードから発売された「梅の香り」は、西原町字小那覇出身の新川嘉徳によって作詞作曲されました。嘉徳は一八九九（明治三十二）年に生まれ、十五歳の時、出稼ぎのため、海外移民としてハワイに渡りました。西原からは一九〇四〜一九四一年までの間、二千五百余りの人がブラジルやメキシコなどへ渡っていきましたが、嘉徳の育った小那覇は、西原で移民する人の数が最も多かった地域でもありました。

嘉徳はサトウキビ畑で働くかたわら電気機械工学を

学び、蓄音機に関する発明で特許を取得し、現地の新聞に「天才音楽家」と紹介されるほどの活躍ぶりでした。手先も器用だったようで、ギターやオルガンなどを自作し、「ニユー・トーン」という楽器も考案したといえます。

日本に帰ってからは大阪に在住し、琉球民謡を当世風にアレンジしてレコードを出したり、一九七一年には「平和行進曲」という曲の楽譜を広島平和記念資料館に寄贈したりしています。

しかし華々しい活躍ばかりでなく、家を抵当に入れ、借金をしてまで催した演奏会に客が入らない、という苦勞もあつたようです。「梅の香り」の歌詞には、苦勞して育てた梅が花ひらくのを待ち望んでいる表現がありますが、嘉徳自身、どこか自分の人生に重なる部分があつたかもしれせん。

また、嘉徳の豪快さを示すような愉快なエピソードがあります。一九五〇年のジーン台風の時、家族の皆が避難しているなか、ヴァイオリンの製作をし続け、悠々と演奏しながら「沖繩で台風慣れているから大丈夫だ」と言い放つたのだそうです。音楽一途な人物

であることがうかがえます。しかし、しばらくして泳いで避難してきた、というオチがついているところもまた何だか微笑ましいですよね。現在、小那覇児童公園内には新川嘉徳顕彰碑と「梅の香り」の歌碑が立てられ、その周りには梅の木も植えられています。正午の時報には通常のチャイム音に代わり、「梅の香り」が流されています。西原の音楽家の思いを偲びながら、春の訪れを感じてみませんか？

（田島）



新川嘉徳顕彰碑。略歴も刻まれています。



今年の白梅。そろそろ見ごろ？

●参考文献「梅の香り」歌碑建立実行委員会作成記念誌／西原町史
第六巻・西原の移民記録